〔病家須知三〕痘瘡のこゝろえをとく○略中

痘瘡の序熱に、搐搦、上弔、不省人事にいたるものに、拊水術の一法を施には、冷水を手巾に浸て、兒の頭上を頻に灌洗、面部をもあらひ、その水、やゝぬるむときには、再冷ものに換て、灌こと八九十遍にいたり、頭面の肌膚冷て、氷のごとくなるに至て止、もし醒覺こと遲ものは、冷水一盞を內服せしめて、治することあり、いづれも見はからひのあること也、○略中痘瘡序熱、卒厥を發するものに、この術を活用して、其急を救、且起脹灌膿の期に至て、巨利を得ことあるは、予が發明、多年經驗の事にして、其必効あるものを認て施行こと、世人もやゝ知るものあれども、かの守杭刻舟之醫は、まゝ首肯せざることなれば、俗家は唯其効あるを信じて用ふべし、

〔病家須知五〕黴毒の心得を說○略中

又最懼べきは癩病にて、古人の天刑病といひしも宜なり、然はあれども、其身體既に潰爛腐蝕たるものも、能灌水治法に委れば、偉功を奏ことあり、これ予○平野重誠が創意の歷驗にて、古人のいまだ言及ざることなり、

鍼灸

〔醫斷〕鍼灸

鍼灸之用、一旦馳逐其病、非無驗也、唯除本斷根爲難而已、如痼毒灸之則動、動而後攻之易治、故鍼灸亦爲一具、而不必專用、亦不拘經絡分數、毒之所在、灸之刺之、是已、

飼蛭

〔續視聽草初集六〕蛭飼考證

ちかき世の人、小き瘡をなやめるには、蛭をつけて、その瘡をすひとらすることをするを、西洋の醫書より得たるわざといへり、此事は、我國、いにしへ人も、ひるかひといひて、せしことなるを、いつしか世に絕て、後には蛭かひといふ詞だに、云る人なくなれるからに、今はじめて、こと國のわざをならひ傳へて、する事とのみ思へり、此わざいにしへぶみに、はやくみえたりとおぼゆれど、